

ムサビの教員が選ぶ

美大生におすすめの本

Recommended books for art students.

視覚伝達デザイン学科
白井敬尚教授

『モダン・タイポグラフィ：批判的タイポグラフィ史試論』

ロビン・キンロス 著，山本太郎 訳，グラフィック社，2020

本書『モダン・タイポグラフィ』の初版は1992年だから刊行されてから早30年以上も経っている。著者、ロビン・キンロスは、イギリスのデザイン批評家、タイポグラフィ史研究家であり、自ら出版社「ハイフン・プレス」を運営・経営する編集者でもある。サブタイトルに「批判的タイポグラフィ史試論」とあるように、本書は従来のタイポグラフィ通史ではない。19世紀末に端を発する近・現代の正統的・伝統的タイポグラフィの系譜、あるいは前衛的タイポグラフィ、そのどちらにも与しない視点でモダン・タイポグラフィを読み解いていく。従来の近代を1900年前後から1800年前後に位置付け、産業と技術、社会構造を加味し、啓蒙主義から歴史復興、モダニズム、インターナショナルスタイルから今日のデザイン情報へと至る時代精神の変容を俯瞰する。そして具体例としてテクノロジーの進化がもたらす活字制作技術工程とその表象も取り上げている。ヨーロッパの印刷における言語伝達のありようを「タイポグラフィ」というキーワードで切り込んだ良書である。内容は専門的。だが、これを読むための基礎知識を踏まえることも含めて学生にとっての良書といえる。（訳者は基礎デザイン学科非常勤講師、山本太郎先生）

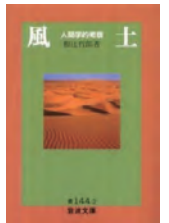


『風土：人間学的考察（岩波文庫）』

和辻哲郎 著，岩波書店，1979

刊行されてから90年近くにもなる名著。著者和辻哲郎（1889年〔明治22年〕—

1960年〔昭和35年〕）は、日本を代表する哲学者であり倫理学、文化史家である。代表作は本書のほか『古寺巡礼』『イタリア古寺巡礼』など美術・工芸・建築にとっても重要な著作群である。『風土』は地球の自然環境を土台（モンスーン・沙漠・牧場という風土の三類型）に、民族・文化・社会の特質を浮彫りにした比較文化論の基礎をなす書である。なかでも第3章 モンスーンの風土の特殊形態（シナ；日本）では、日本とは何か、日本民族が何によって存在し得るのかを規定し問いかける。日本における全ての事象は風土という自然環境あってこそだということを端的に記述。デザインはもとより、それを支える、言語、そして記述言語のありよう（視覚伝達、言語伝達、タイポグラフィ）も全ては和辻の問いかける日本という島国の自然環境を理解すれば、まずはそのとば口には立てるはずだ。日本人は——なぜ言語を持たなかったのか、なぜ大陸人のように痕跡を残さなかったのか、なぜ消え去るものに固執しないのか——など、我が身の素朴な問いかけに見事に答えてくれた書である。



『黒船（中公文庫）』

吉村昭 著，中央公論社，1994

『黒船』は小説家吉村昭の幕末歴史小説の1冊。通訳としてペリー来航時にオランダ通詞として参加した堀達之介（1823年〔文政6年〕—1894年〔明治27年〕）を主人公に開国へと向かう一人の日本人の姿を描いている。タイポグラフィを生業とする当方にとって、オランダ通詞といえば本木昌造（1824年〔文政7年〕—1875年〔明治8年〕）である。本木も主人公・堀達之介と同じく幕末から明治にかけて長崎の出島でオランダ通詞として活動をした人物（なんと1歳違い！そして同じ出島で同じオランダ通詞）。本木は自ら独自に活字製造に着手、挫折し、上海からアメリカに帰国途上のウィリアム・ギャンブルに指導を乞い、日本で初めて近代活字版印刷術を導入した始祖である。もっとも本木そのものを知るには『本木昌造伝』島屋政一著（朗文堂 2001年）、『逃げる男』江越弘人著（長崎新聞社 2003年）がある。しかし『黒船』には通詞の置かれた当時の状況や環境、そして動乱の時勢の中で通詞の翻弄される姿が生き生きと描かれている。本書は堀を知ることによって本木を知ることができるという楽しみ方が出来る書なのだ。

